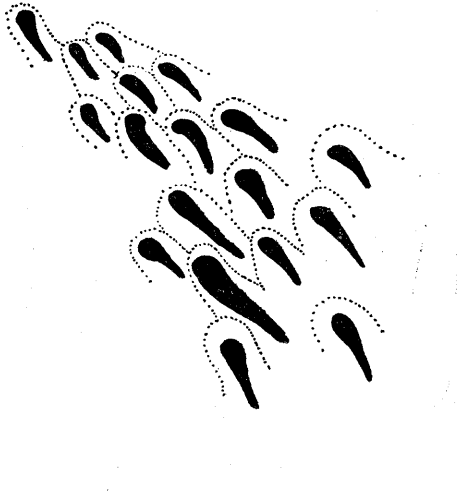


第十二回 ダ行の夢想

堀内 守



身からの発想

風邪は万病の元という。昔からの言い伝えである。風邪が弾き金になって、もっと悪い病気を誘発するということである。でも、風邪を防ぐ決定的な薬品はないようだ。

こんなことは、子どもの世界には通用しない。風邪を

引くと、熱が出る。鼻水やせきが出る。時折は鼻が詰まることもある。

そんなとき、子どもは、早速ある身体的なできごとを感受する。

鼻が詰まる。とたんに、自分の声ではないような自分の声になってしまふ。顕著なのは、「ナ行」が出にくいということである。「ナニヌネノ」が突然おかしくなつて、何だか「だにどうでど」のようにきこえ出す。この奇妙な音を書きあらわすには、カタカナでない方がふさわしいようだ。理由はうまく説明できない。感覚的なのである。カタカナのように風通しのいい表現よりも、いささか淀みのあるひらがな表記の方がいいように思える。

とはいえ、これには確実な根拠というものがない。

「はだがびぐださい」

「はだをがぶのがい」

こんなぐあいになつてしまふ。

最初のうちは、こんな調子で、遊びに仕立てあげるこ

とも可能だ。しかし、もう少したつと、話は変わつてくる。相手がいるうちは、これが演出になるので、まぎれていられるのであろう。そのうちに、ひとりになつたとき、「はだがびが欲しい」というような言い方は、ことばの上だけの問題としてではなく、自分の身体の不しきとして実感されるようになるのである。

「はながみください」という、鼻から空気が気持よく抜ける代わりに、「はだがびぐださい」のごとき、情ないことしか言えない自分が対象になるからである。

歯が抜け代わる

幼稚園時代は歯が抜け代わる時期だ。大体が前歯からぐらつき出す。根が浅い乳歯だから、簡単に抜けてしまふ。しかし、ご当人にとっては「簡単」どころか、大仰なできごと以外の何ものでもない。家中をまき込む騒ぎになる。

抜けた歯を掌にのせてつくづく眺めた体験はどなたもおもちだろう。もっとも、大体は忘却してしまうのだ

が。

この眺めは、ちよつぱり物悲しいところもある。抜けた歯の根に当たるあたりには少し血のあとが残っている。この歯と、自分とを結びつけていた部分のあらわれである。自分の一部だったものが、いまや完全に自分と離れたものになっている。

さて、抜けたあとの舌ざわりが変である。歯のあったあたりは、スースーと空気が抜ける感じ。慣れるまでには時間がかかりそうな不安な気持。試みに何か言ってみる。何かが抜けてしまうようで、はなはだ頼りない。

数日にして慣れるのだが、歯の抜けたあとを鏡に写してみると、まだそこは痛々しげに見える。

ごていねいに、歯の抜けたことを友だちに告げまわす。先生にも、秘密のように打ちあける。なかにはわざわざ口をあけて、「ほらね」と得意そうに見せたりする子もいる。

上の歯が抜けたら家の床下に、下の歯が抜けたら屋根の上に、というような風習は、どこまで広がっている風

習なのか、よくわからないが、早く歯が生えてこいという呪術の一種であることはたしかだ。気の弱い子は、自分の抜けた歯を大切にしまっておき、いつのまにかそのままそっくり忘れてしまうこともある。こんなとき、その忘却の平安を脅かす友も出てくるから、子どもの世界というものは起伏に富んでいる。大ていは右の呪術からの脅かしである。「抜けた歯はちゃんと、屋根の上か、家の床下に収めないで、新しい歯が生えてこない。なに？　なくしてしまったって？　そりゃ、大変だ」

思わせぶりの脅かしに、歯をなくしてしまった子は、とんだことをしてしまったとあわてふためく。本当は、一晩でけろりと忘れてしまうような脅しである。一夜明ければ、歯をなくした事など、物の数ではないのだが、そこは子どもの世界の手の混んだ外交。

なかなか、その場では慰めは見出せない。

夕行の発見

さて、鼻が詰まった時に戻ろう。

「わたくしは」は「わだぐじは」に近くなる。「だぢづでど」がふしぎなはたらきをしはじめるのである。

まずは擬音である。ダ行の擬声、擬音の多いこと！

だんだん、ぢりぢり、づぎづぎ、でれでれ、どんどん……。少し、手の混んだやり方をする、どんちゃん、どんちゃか、どんでんがえし、どですかでん。

まるで、ドチ、ドチ、ドチラニシヨウカナ。テンノカミサモノイウトオリ。ドミンミド、ドンドコドン、ヒュー、ドロドロからドン・キホーテ、ドリトル先生まで広がっていく。

ドラネコ、ドロップ、ドロングーム、ドーラン、ドア、ドライヤー、それに、アラン・ドロン。ドラエモン。泥ちゃん、泥的、泥棒、泥絵、泥絵具

泥の体感

辞典を引く。きまり切ったこと、わかり切ったことを、どう説明してあるかを調べる楽しさ。ひそやかな楽しさ。

「泥。水のまじった柔かな土」

まったく、そのとおり。文句のつけようがない。が、全面的に文句をつけたくなるのが泥に関する身体記憶である。ことばでは、ああ定義するより仕方ないだろうと思っても、身体の方が認めてくれない。あんな短い、きまり切った「定義」など、ちゃんちゃらおかしくてねえ、と反論し出す。ただし、残念なことに、この体感は、容易に文字にならないのである。

そこで、現代も現代、文明の最先端に行く子ども文化の探索に出かけてみる。

ああ、やっぱり、泥は子どもを誘発しているのが見える。おとなの眼から見ると、泥んこの中にわざと入る子どもの気が知れないということになりそうだが、泥水、泥沼、泥の海は、子どもの格好な冒険の場になる。ことに雨あがり。舗装ばかりになったとはいえ、まだ園内には水溜りができている。そこをのぞき込む。うまくいくと、空の雲までが鏡に写るように写っているし、それをのぞき込む自分の顔も写る可能性だってある。

ゴム長で、泥水を飛ばしてみる。あるいは「柔かな土」になった泥を手にとって、団子にこねあげてみることもできる。まるで縄文時代に戻ったような手の感触。形、手ざわり、土の匂い。土に匂いというものがあるのですよ。

団子に掌の紋様が残る。あら、ふしぎだ。

どうしてか、子どもは、この次の瞬間に、泥団子をかならず、勢いよく、掌の上でつぶしてしまうのです。もったいない、と思うよりも先に、ふたたび団子につくりあげるスピードを感受すべきですね。

「あらあら、何やってるの？ 泥んこじゃないの」ととがめる人にも理あり。泥んこになった洋服を洗うには、特殊なやり方が必要ですもの。まず、大ざっぱに泥をかきおとす。次に、湯につけ、たわしでこする。下洗いをさっとやり、その次になって、やっと石けん水を。あわててごしごしとやってごらんさない。土は実にしぶとく残るものですから。

手足の泥を洗い落すにはシャワーがいちばんです。

ただし、どうしたものか、子どもにやらせると、盲点のところがあり、いくつかの部分の洗い残してしまます。

こんなことはどなたにも身におぼえのあることである。格別取りたてていっくほどでもない。と思うけれど、念のため、申しあげておかないと、忘れたという方もいらっしゃるだろう。

身におぼえのあること

身におぼえのあることは、ことごとくがうまく言語化できません。しかし、まったくの言語以前かというところ、反対です。何としても、ことばがないと、身におぼえのあることは、すぐに形をなくしてしまいます。

あ、そうだった。急に思い出しました。そもそも「泥」という字には、面白い、われがありましてね。それは、南海に住むという、骨のない虫の名前なんですって。それをうまく引きずっているのが「泥酔」ですね。このい、われがわからないと、どうして「泥」と「酔」が結びつ

くのか、ピンとこないでしょう。

あなたの身におぼえのあることをひとつおたずねしてみます。

太鼓はなんて鳴るのですか。はい。ドンドン。いいえ、違います。太鼓はドンドコです。反対、太鼓はダンダンです。否、太鼓はドーン、ドンなり。いいえ、ポンポコです。何をおっしゃる。太鼓は昔からデンデンにきまっています。「デンデン太鼓」というじゃありませんか。

太鼓の音はかくも多様です。

だん、ぢん、づん、でん、どん。

これを応用して、身におぼえのある音をいくつつくれますか。

だんたい、だんぞく、だんそう、だんせい、だんすい、だんげん、だんべん……。

ぢんぢん、ぢんは少ないですねえ。

づんづん、づんづん積る。雪ですね。

でんでん、でんげん、でんがく……

どんは、どんじり、どんつう、どんぞこ、でんでんかえし……。

では、もうひとつ。

ドロドロ。うあ、こわい。ヒュー、ドロドロ。いや、ドロちゃん。泥的、泥棒。

おたずねしますが、いったいどういうわけで国語辞典に「どろんこ」という呼称が載っていないのですか。あなた、自分でたしかめましたか。はい。

それはですね。きつと「どろんこ」は、幼児語だからでしょ。まさか。辞典にはちゃんと「俗」として俗語まで載っているはずなのに。幼児語は「俗」という記号よりも下に見られているのでしょうか。

泥の名乗り

泥は名乗り出ることもある。我は何々なるぞ、とか、我ここにあり、という風情がするのを貴殿は感じとられるや。

「わしは泥でい。何でい。」

泥土を「でいど」と訓みます。「デイト」と訓んだらまちがいでしょうか。そうですね。まちがいと断ていすることもできませんが、何しろ、こういう時代ですからね。ハイ。

はあ？ 何をおっしゃるの。あ、「泥」を「でい」と訓む場合の例でした。

泥炭、「どろずみ」じゃない、「でいたん」です。泥溝「どろみぞ」ならぬ「でいこう」です。何だか「でえたん」↓「大胆」、「でいこう」↓「でいこ」↓「大根」みたいですねえ。

この方面の横綱格は何といっても、「泥濘」です。どうか「でいねい」とていねいに発音なさってくださいな。

レトリック

ちょっと、うかがいますが、子どもの時の泥んこ遊びの体験は、個々のシーンは忘れてしまったのちも、大きな体験として残存するようなのですか。

そのようですね。そして、「泥」的な体験は抜け落ち、身軽になった「泥」という記号は、悠々と飛翔しまして、実に抽象的な意味を帯びるに至ります。

早い話。「泥をぬる」「顔に泥をぬる」が一つ。あるいは「泥を吐く」。

「泥くさい」などというのも、具体と抽象という二様の意味をもちます。抽象的になった場合は、今日いうところの「ダサイ」に近くなります。

限りなく「ダサイ」に近い泥。
地名にも「泥」はいっぱいありますね。

泥土町、泥亀町、泥田町。いずれも音でよむから、調子も格も整います。「でいどちよう、でいきちよう。でいでんちよう」。しかし、訓読したら、ちょっとイメージが変わりますね。「どろつちちよう。どろがめちちよう。どろたまち」。

文脈で変わる場合もありますね。

「交渉は泥沼に入った」のたぐい。

元来「泥」にはマイナスのイメージがないはず。それ

を示すものが「どろやなぎ」。これは、別名白楊です。

「白楊」となると、話は「どろ」から離れます。

「どろやなぎ」を「どろえのぐ」で描いた「どろえ」

泥やなぎを泥絵具で描いた泥絵。いかにもどろどろして
いますが、実物を見ると、立派なものです。

そういう泥試合はやめてください。そして、議論をも
っとまっとうにやってください。

泥と砂

思うに、「泥」は悲しいシンボルなのです。われ泣き
ぬれて砂浜にいたから歌になるのでありまして、泥沼に
いたのでは詩になりますまい。まったくまじめな話。幼
稚園にお砂場がありますけど、あの「砂」は何故に砂な
のであるか。ご存知ですか。

だって、泥だったら、あと始末が大変です。

そういう実用的な説明は当を得ておりません。秘密は
もっと深遠なところから生じました。それを解く鍵をお
教えします。それは、幼稚園でなぜネン土を活用する

か、と問うてみるとよいのです。そもそも、最初には泥
があったのです。その泥がネン土と砂とに分かれて取り
入れられた。ここにヒミツがあるのです。

つまり、泥というシンボルは、荒々しさの象徴なので
す。それを手慣づける。そして、コントロールできるも
のにするために、それをネン土と砂に分離する必要があ
った。どうです。ネン土の方は、形をつくれる。しか
も、時がたつとその形のまま固まります。他方、砂はよ
ごれないし、手ざわりがよろしい。しかも、形はすぐに
崩れる。

泥をプラスとマイナスの双方の符号をもった存在だと
すると、ネンドと砂は、それぞれどちらかだけをもった
存在なのです。

申しあげたいことをもう少し続けますと、園内の砂場
には、いろいろな小道具を持ち込んで隠してもすぐに見
つかりますね。そこが面白いところ。ケガもしません。
これに対し、「泥」の方はキケンなものに見なされてい
ます。だから、手袋をはめて泥と向き合う。いい例が、

オイモ掘りの時の白い軍手。あの白は泥という神秘的な
アブナイものを鎮める徴しほのようなものです。軍手はどん
なに泥で汚れても当然と見なされている白手袋です。同
じ白手袋でも、まさか絹の白手袋を使ってオイモ掘りを
やるわけにはいけないというわけですよ。

あの白い軍手をはめさせるのはなぜなのでしょう。
破傷風菌がいるかもしれないからというような説明では
当たっているとは思えませんよ。あれは、やはり実用的
な意味づけを超えた象徴的な意味の白手袋なのです。

泥と腕白

だって、別の例もありますよ。泥んこ遊びをする子ど
もは大体「腕白」なる名称を与えられていますね。

そう、そう。よくなりますね。「腕白でもいい……」
とか何とかいうCM。あ、あれももうだいたい古いのでし
たっけ。

あの「ワンパク」は、「ワンバク」とも訓みますね。
しかし、いわれは実はよくわかりません。何でも「関

白」がなまって「腕白」になったのだという説もあるよ
うですけど。

「腕白」のイメージは、元来は、言うことをきかない、
きかん気の子どものことなのです。それがいつのまに
やら変化した。マイナスイメージだったのが、いまでは
「丈夫」とか「たくましい」というプラスのイメージに
変わったようですね。

これは「泥」のイメージ変化ともみごとに対応してい
るのですよ。

だってね、ネン土は、今日では教材としては油ネンド
でしょ。砂の方も、なくなれば、園内の砂場の砂は、あ
る期間過ぎると、土がまぎって、しだいに土に近づくの
です。雨でも降れば、砂場も泥沼に近づくのです。おわ
かりのように、泥はこの場合のマイナスイメージです。

園内があまり気を遣われ過ぎ、無菌状態に近くなる。
すると、荒々しい泥が呼び込まれるのです。ただし、本
物の泥をもち込むのではなく、象徴的な儀式としてね。
「腕白」は、だから、音としては「ワンバク」どまり。

ぜったいに「ワンバク」に戻ることはないと思いますよ。だって、「ワンバク」の音には、ふたたびコントロールできかねるイメージがある。これに対し、「ワンバク」は、今日ならだれでも、自分のコントロール下に置けるものとして認めるけいがありますからねえ。

あなたの話をきいていると、だんだんと、どろどろしてきて、どろな方式に対応していくことがむずかしくなります。ドンデンがえしもありそうないもしますし。

いや、ご心配なく、ダ行の戯れに過ぎないのですか。子どもが、ナ行の音を使って、どんなにぎやかに戯れるか、ひそかに舌を巻いているのです。それは、いずれも、こちらの身におぼえのあることを、遠くの忘却の世界から引き出してきてくれるのですよ。

この面から見ると、「ドレミファソ……」の最初の音が「ド」だったのは、日本語の音の構造とうまく合ったのでしょね。

まったく、子どもから教えられるとはこのことなので

す。

時折思うのです。この子たちが大きくなっていく途中で、漢語に酔う時期がかならずあるだろうと。その時、彼らの自己演技に力を与えるのがダ行です。

「断乎」「断然」からはじまって、「駄々」をこねているように見えながら、「断念」したり、「断言」したりして伸びていくでしょう。

(名古屋大学)